

# 道新スポーツ旗・北電カップ全道少年団大会

2009年

9月19～22日



## AFAテクニカルレポート

【報告者】 國田英一郎 齊藤正倫 間宮健三郎

### 1. 網走地区代表3チームの闘い

今大会には、網走地区代表として、網走市サッカー少年団・北見イーグルス・北見オニオンキッドが出場した。地元開催での全道大会ということで、周囲の期待も高い大会となった。それに応えるように、3チームともにより闘いを見せ、網走市がグループ1位、イーグルスが同2位で決勝トーナメントに進出した。オニオンキッドは1勝1敗1分けで、決勝トーナメント進出こそならなかったが、選手個々は最後まで闘っていた。

### 2. 豊富な運動量

3チームに共通していえることは運動量が豊富であったことである。特に、守備に関してはボールへのアプローチや、ボールの移動に伴う全体のポジション修正などの意識は高かった。

攻撃としては突破やサポートの意識はあるもののFWとそれに近いポジションの数名がボールに関わる程度で展開されることが多く、運動量はあっても効果的に関わりあいながらボールを運ぶことは少なかった。

豊富な運動量を土台として、パスやサポートの質を高めていくことがこれからの課題になるであろう。

### 3. スウィーパーシステムのメリット・デメリット

網走市とイーグルスは、能力の高い選手をDFの底に置いて、主にスウィーパーとしてカバーリングをしていた。このことによって着実にボールを拾って攻撃

の起点になることもできていた。しかしながら、このことによっていくつかのデメリットも生じていた。

#### (1) 個の育成として

ユース年代で身につけていくべき守備の技術としては、チャレンジ&カバーを状況に応じて瞬時に判断しながらボールを奪うということがある。スウィーパーシステムを用いることによって、それが分業制となってしまう、結果的にチャレンジ&カバーの技術を、個人戦術・グループ戦術として“個”が身につけられないままに次の年代に進んでしまうということがある。

#### (2) 結果としてチームのデメリットになることも…

一人ですべてをカバーすることはできない。ときにスウィーパーがボールにアタックに行ったり、ボールサイドのカバーを中心に行ったりするとき、他の選手(GKも含めて)のカバーリングの意識が低かったり、そもそも技術として身につけていなかったりすることで、失点に結びつくこともあるであろう。実際にそのような場面が多く、試合を落とす結果になってしまったチームもある。

指導者は、チームの利益と個の育成のバランスを考えなくてはならず、戦術の選択には悩むところではあるが、育成を長いスパンで考えて、個の育成が結果としてチームの利益になると信じていくことが必要ではないだろうか。選手とともに歩む指導者の取り組みに期待したい。

#### 4. 前線の崩し

日本代表の戦いを見て、決定力に乏しいと思う方は多いだろう。それは、北海道の課題であり網走地区の課題でもある。それを生んでいる原因が、育成年代の戦いにあるのではないだろうか。

今大会は、後ろから前線へボールを放り込んでこぼれ玉を拾ってゴールをねらうチームが多く見られ、非常に残念であった(網走地区に限ったことではなく)。ボールを意図的に運んで前線を崩し、多くの選手がペナルティボックス付近で関わり、意図的にゴールするプレーを、この年代で身につけていかなければ、日本の課題は永遠に克服できないのではないだろうか。

#### 5. ボールを持つことを怖がらない

技術の低さや自信の無さゆえに、簡単にボールを放してしまい、効果的な攻撃ができていない場面を数多く見たが、網走市少年団は、ほぼ全員がボールを持つことを怖がらず、状況に応じてプレーを選択していた。ボールを持つことで、味方が準備する時間ができ、ポゼッション率の高さにつながっていた。ボールを奪ったあとも、簡単にロングフィードで逃げるのではなく、GKへのバックパスなども選択肢に入れたりして、ボールに関わる選手が多いのが顕著であった。

ワンタッチプレーは、相手の準備する時間を与えないという点ではメリットであり必要な技術であるが、肝心の自分たちの準備が整っていなかったり、タイミングが合っていないかったりするのは、その効果も薄れるであろう。

ここでも、指導者の(だけでなく選手本人も)忍耐が必要になるのではないだろうか。

#### 6. 北見オニオンキッドの闘い

前線から、ハイプレッシャーをかけてボールを奪おうとする姿勢が見られた。ただ、奪ったボールを前線に配球する際に意図無く蹴ることが多かった。その原因としては、供給側のアイディア不足もあるが、受ける側の中盤やトップのサポートが十分に幅と厚みをとれていないということもある。また、奪ったボールを、奪ったサイドと同サイドで攻撃することしか考えていなかったり、視野が狭かったりするために、相手の守備ブロックの中を、無理に突破を試みてボールを奪われるケースがあった。

それでも札幌緑戦の後半は、それらを修正し、ボランチを経由しての攻撃が増え、チーム全体でつないでいこうとする意識が見られ、ゴール前までボールを運ぶシーンが増えた。ただ、ゴールの意識が乏しく、チャンスと見られる場面でもシュートを打たなかったり、トップがボールをもらうタイミングを考えていなかったりして、効果的にゴール前を崩すことができていなかった。

これからの課題としては、相手DFの状態によって、前を向くためにどのようなアイディアを駆使していくのか、グループとしてどう打開していくのか、その判断の質・プレーの質を高めていくことだと思われる。北海道の強豪と闘うにあたって、FWが裏をねらうプレーだけでなく、MFの関わりを増やし、ゴールするまでの前線の崩しのアイディアを磨くことで、さらに上を目指すことができるチームになると考える。

#### 7. 北見イーグルスの闘い

中盤と最終ラインの底に能力の高い選

手を置き、運動量豊富なFW2名を前線において、ゲームの中心を担っていた。基本的な技術を身につけているので、時間とスペースがあるときなどは、効果的な攻撃をすることができていた。今後は、時間とスペースが無い状況でも打開できるような選択肢を多くもち、ピッチ全体の状況を把握する力をつけて、より質の高いプレーを選択できるとよいのではないだろうか。

ただ、場面(相手)によってもしくは選手によっては、時間とスペースがあっても、タイミングや状況を考えずにただ蹴るだけになってしまうことがあった。ピッチ上の選手個々のレベルを上げるためにも、指導者としては粘り強くプレーの質を要求していく必要があるのではないだろうか。そうすることで、中心選手の選択肢も増えていくと思われる。

守備の意識は高いのだが、全体が下がりがすぎたしまい、相手に中盤のスペースを自由に使われる場面も目立った。そのため、ボールを奪っても、中盤が効果的な位置でサポートできず、ロングフィールドに頼らざるを得ないのではないだろうか。

戦術を改善するだけで十分北海道の強豪とも闘えるのではないかと思われるチームであった。今後の更なる成長に期待したい。

## 8. 網走市少年団の闘い

攻守にわたるハードワーク、特に守備で相手ボールに対し素早くプレッシャーをかけて複数でボールを奪う積極的なプレーが随所に見られ、予選リーグ・決勝トーナメントとも試合の主導権を握り戦いを進めることができていた。また、相手のプレッシャーが弱い場面では個々が状況判断をし、サイドから相手を崩す効

果的な攻撃が見られた。

ただ、相手のプレッシャーが強い中で「観る・観ておく」ことができず、無理に前を向こうとしてファーストタッチでボールを失う場面があった。また、相手DF陣が整っている状況でも不用意にドリブルで仕掛けてボールを失う場面も見られた。周囲の選手が関わることでボール保持者の選択肢を増やし、チームでボールを回しながら相手のバランスを崩していくことができれば、さらにチャンスが増えるのではないか。今後の更なる成長に期待したい。

## 9. まとめ

今年度、初めての取り組みとして、網走地区独自に、4種大会のテクニカルスタディを行った。このことによって、個の技術・戦術が見えたと同時に、チームの戦術もうかがい知ることができた。「個の育成」という観点に立ってみると、そのチーム戦術がデメリットになってしまうことも実感できた。勝負にこだわらないなら、それはサッカーではないが、勝負にこだわるあまり「個の育成」が滞ってしまうこともある。すべての試合を観たわけではないが、網走地区だけでなく、他地区のチームについても、改めて実感した。我々指導者は、日々、自分を省みて指導力や指導観を磨かなくてはならないのではないだろうか。

最後に、このレポート作成にあたって、各チームの指導者の皆様には、忙しい合間を縫って、我々スタッフとのテクニカルミーティングに応じていただきました。この場をお借りして、感謝申し上げます。今後の各チーム・選手の益々の活躍に期待いたします。ありがとうございました。